

# Housing Tribune

Today for Tomorrow

<http://www.sohjusha.co.jp>

**日本とEU間のEPA交渉が大枠合意**

構造用集成材など8年目で関税撤廃へ

**戸建の買取再販事業が活発化の兆し**

住宅業界内外から新参入の動き

**本格化するのか!? 戸建住宅向け積立金制度**

メンテナンス資金の確保を支援し、生涯顧客化を促す

**2025年、木材自給率5割達成へ  
構造材から内外装材まで**

**住宅・建築業界で広がる  
国産材活用の波**



## 伝統工芸技術を建築材に応用するコーディネート事業を推進 事業を通して新たな市場の開拓も支援

和傘製造を行う日吉屋（京都市上京区・西堀耕太郎社長）が伝統工芸技術を建築材に用いるコーディネート事業を進めている。伝統工芸事業者による新市場の開拓を支援することで、伝統工芸の維持・発展に寄与したい考えだ。

日吉屋は、京都で約160年前から和傘製造を行う会社である。「野点」と呼ばれる屋外で茶や抹茶を楽しむ茶会で使用する大型の傘から一般的な和傘の製造もしている。

同社が今注力しているのが、伝統工芸技術を建築分野に活用するために伝統工芸技術者と建築家らを結びつけるコーディネート事業「JAPAN DESIGN LIGHTING&INTERIOR(JDLI)」である。この事業は、日本の文化的背景や和を基調としたデザインが注目される中、伝統工芸技術を応用して意匠建築材を特注で制作するというもの。同社が伝統工芸職人やメーカーと、建築家やデザイナーなどの間に入りながら、伝統工芸技術を活かした意匠建築材の開発をサポートする。

同社は、日用品としての和傘の需要が減少する中、需要開拓のため和傘技術を応用した「古都里—KOTORI—」という照明器具の開発、販売に取り組んできた。これは、竹の骨組みに和紙を貼り専用の灯具とセットにしたもの。和傘の特徴である竹骨の幾何学構造と、和紙や布地を透過して広がるやさしい光が特徴だ。シェード部分は取り外しが簡単で、季節やシーンに合わせてシェードの色柄を楽しむことも出来る。生活に馴染みが薄く



和傘技術を応用した照明器具「古都里—KOTORI—」は、和紙を透過して広がるやさしい光が特徴



厳選された「かけら」を使用して作られる「ねぶた」の彩色和紙を利用した照明器具「KAKERA(かけら)」

なってきた和傘を、現代的な生活に合う形に変換させた。「古都里—KOTORI—」の評価が高いことから、和傘以外の伝統工芸技術の応用による商品開発や伝統工芸技術の普及とともに、伝統工芸職人への新たな市場の開拓も支援する。

### 伝統工芸を現代の生活に結びつける

「JDLI」のひとつに、青森県の代表的な夏祭り「ねぶた」を利用した「KAKERA(カケラ)」という照明器具がある。これは、毎年その年の祭りが終わると解体されてしまう「ねぶた」の彩色和紙の切れ端を利用して制作されるもの。ねぶたから取った彩色和紙のうち「墨跡」「蠟引」「彩色」の三大技法が用いられた部分のみを厳選してシェードに使用している。

「ねぶた」を作る「ねぶた師」という仕事は、1年に半年間という期間の決まった仕事であるために、最近は経済的な理由から「ねぶた師」を継ぎたいという人が減っているという。こうした背景から「KAKERA(カケラ)」は、「ねぶた」作り以外の半年間でねぶた師により制作されている。新しい建築分野での需要開拓を進めることで、技術の伝承や後継者問題などにも貢献したい考えだ。

培われてきた日本の伝統工芸技術を残すためにも、今後は一層の伝統工芸技術の発掘、応用商品の開発、新需要開拓に取り組む方針だ。第一営業部課長の平山大輔氏は「伝統工芸は、他の業界と組んで現代的な生活に直結した道筋を見つけることが必要だと考えている。歴史やストーリーのある伝統工芸を、現代的にアレンジして意匠建築材として使える形を確立していきたい」と話す。